

(第38回) 音楽鑑賞会

～紀尾井ホール室内管弦楽団第123回定期演奏会～

9月12日(土)に紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)の第123回定期演奏会に赴いた。前日11日と合わせ11名のアイアン・クラブ関係者の方々が参加された。

本年はKCO創立25周年であり首席指揮者のR.ホーネックの任期が延長され、「未来への向かう新たな挑戦」と銘打って大いに盛り上がる事が予見された。しかし年度開始早々から年間5回ある定期演奏会のうち新型コロナウイルスの流行と感染防止対策のため4月と6月の定期公演2回が中止となり、アイアン・クラブにとっても今回鑑賞会は2月14日・15日の第120回定期演奏会以来の待望していたものとなった。しかし、今回開催は未だコロナ禍の中であって、主催する(公財)日本製鉄文化財団並びにKCOは会場席数の限定をはじめ3密対策、非接触対策など周到かつ万全な配慮を行い参加者も協力して安心できる環境での実施にこぎつけたものであった。また、当初予定された在豪の指揮者(R.トネッティ)の来日が叶わなくなったこともあり、KCOは指揮者不在での演奏会実現に演目を総入れ替えるなど思い切った工夫と努力が窺われた。

この日はKCO演奏メンバー60余名の内、コンサートマスターを務める玉井菜採の他23名の弦楽奏者による演奏であった。尚、演奏開始前に主催者から感染防止対策として「ブラボーは心の中で、感動は大きな拍手で」とのアナウンスが流され、また指揮を執る筈であったトネッティの豪州からのビデオメッセージがステージ正面の壁に映され、渡航禁止が解けた暁には一刻も早く訪日し「姉妹」のようなオーストラリア室内管弦楽団及び日豪両国の友情を祝いたいと述べられた。

プログラムは、休憩を挟みそれぞれ作曲家が異なる前半・後半各2曲であった。

(1) グリーグ (Edward Grieg, 1843～1907)

・弦楽合奏曲 組曲「ホルベアの時代から」全5曲 Op.40

L.ホルベアはJ.S.バッハと同じ時期に活躍した著名な劇作家で、グリーグと同じくノルウェーのベルゲンが生誕地であった。この組曲はベルゲンでのホルベア

の生誕200周年記念祭に寄せてグリーグが作曲したものである。曲名からバロック調を想起するが、宮廷の華やかさと共に曲を通して祝祭の喜びがダイナミックに伝わり高揚感を感じさせる曲である。

筆者には楽器の音色をじかに耳にするのは7ヵ月ぶりであったためか、弦の響きがとても新鮮に思えた。各楽器パートはよく揃い、全体として迫力ある立体感をもって伝わる演奏にウキウキする気分が味わえた。

(2) マーラー (Gustav Mahler, 1860～1911)

・交響曲第10番 第1楽章 アダージョ (弦楽オーケストラ版)

マーラーが人生最後に取組んだ謂わば遺作となった5楽章からなる交響曲だが、未完のまま逝去した。第2楽章以降は大まかなスケッチだけが描かれ、没後幾つかの補筆版が作られそれぞれ演奏されたが、第1楽章はマーラーによりほぼ浄書に近い段階で演奏可能なレベルで残された。

今回の演奏は弦楽オーケストラ版で、トランペット等管楽器の響きに代わり弦楽器ならではの透明感を漂わすものとなった。

この曲はマーラーにとり人生の苦節と重なるものがあり、虚無感、皮肉、浮遊感、一抹の希望、慰め、達観、柔和を物語っているように思える。

KCOの演奏は、ビオラから始まりチェロが加わって音色に深みが増され、それにバイオリンが明るさをもたらすように聴こえ、重厚な中に一筋の光を見るようなイメージでマーラーの思いを味わい深く表現するものであった。

(3) ゴリホフ (Osvaldo Golijov, 1960～)

・ラスト・ラウンド 第1楽章

ゴリホフはルーマニアとウクライナ出身のユダヤ人の両親が移民したブエノスアイレスで生まれ音楽の教育を受けた。成人となってエルサレムで3年間を過ごし彼の地の音楽の伝統を学び、現在米国で活躍し

ている。

作風は生まれ育ったブエノスアイレスのタンゴや両親から受け継ぐユダヤ系の伝統と音楽、更にジプシー音楽を滲ませるものと言われ、クラシックの室内楽曲、レクイエム、オペラのみならず映画分野の作曲も手掛けている。

ゴリホフは「リベールタンゴ」を作曲した A.ピアソラのタンゴに強い影響を受けて、「ラスト・ラウンド」はボクシングのラウンドになぞらえて 1991 年に逝去したピアソラの不屈の精神が再び立ち上がることを表すものである。

タンゴを模したこの曲風に合わせ、KCO の演奏者は全員赤い布を身につけて登場する演出はよく考えたものであった。バイオリンパートがバンドネオン、それにコントラバスが加わり深みが増し加わり、徐々にリズムも速まりタンゴに似た力強い演奏となった。最後は映画を思わせる劇的な終わり方で、KCO の躍動感あふれる醍醐味と演奏の幅の広さが印象的であった。

(4) ブラームス (Johannes Brahms, 1833~1897)

・弦楽五重奏曲第2番 Op. 111

この曲はブラームスが逝去する 7 年前に書かれた。ブラームスは当初交響曲第 5 番を構想したが、当時創作能力の衰えと作曲の新たな潮流を意識して頓挫し、弦楽五重奏曲として作曲された。KCO の演奏は、交響曲を思わせるブラームス独特のスケールの大きい重厚壮大さと艶やのあるのびやかな旋律を見事に奏で、感動的な演奏会のフィナーレとなった。

筆者を含め多くの方には今回の演目は日頃聴く機会が少ない珍しいプログラムであったかと思うが、演奏後の鳴りやまない拍手は冒頭アナウンスがあった通り「感動を大きな拍手で」を正に示したものと思われた。素晴らしい演奏を目の当たりに聴く体験は、パソコンからの音声の日頃接する身にとって「不急」はいざ知らずとも決して「不要」に非ずとの確信をもって感動の余韻に浸りながら家路についた。

(福田 修一・記)

